

# 花束

影橋真海

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

たくさんの草花がまとめられた花束。そしてそれらは物語を語る草花。

『さあ、一輪取ってみよ！あなたを我が世界へと誘おう』

# 目次

【和蘭芹】	1
【一輪の彼岸花】	4
【二輪の彼岸花】	17
【三輪の彼岸花】	27



## 【和蘭芹】

「もう帰ろうかな…」

少女は腕時計を見て呟く。ちょうど七時を過ぎたところだった。椅子に座ったままぐーっと伸びをする。机の上には山積みにされた参考書。この図書室で勉強を始めて約四時間。あたりはすっかり暗くなり、机を照らすライトがより明るく見えた。少女は高校三年生で、大学受験のためにこの時間まで残り、勉強していたのだった。

参考書を元の棚に直し、鞆を持って廊下に出る。その瞬間、冷たい風が吹いた。思わずぶるっと身震いする。鞆の中から厚手のコートと手袋を取り出した。図書室内は暖房が効いていたので必要なかったのだが、廊下はあまりにも寒い。昨日降っていた雨のせいで余計に気温が下がっているらしい。

鞆を持ち直し、階段へと向かう。電気のついていない教室が、廊下が不気味だった。時折ドアから吹く隙間風が立てる音が少女の心を不安で満たした。

月明かりだけが照らす廊下を一人、歩く。カツン、カツンと少女の履いているローファアの音が廊下に響く。それがまるで、自分の後ろに誰かいる気がして自然と歩幅が



今まで感じていたよりも冷たい風が少女の頬を撫でた。その瞬間少女の足は動きを止めた。永遠に続くのではないかと思うほどの長い間、先も見えない場所に向かって行くことを体が拒んでいた。もうこれ以上ってはいけなないと、本能が叫んでいた。

けれども少女は階段を下った。何かに引つ張られるようにして、まるで糸にくくりつけられた人形のように。わかっているのに、拒めない。どんどん下に引き込まれて行く。

——その後少女の姿を見た者はいない。ただ、図書室近くの階段には少女のものと思われる制服と鞆などが落ちていたという——

【枯れる】

## 【一輪の彼岸花】

早朝の陽光が、白く質素な部屋に差し込んでいます。窓から風が吹き込み、この空間を満ちます。

この部屋の主――由美は陽が当たらない部屋の端に縮こまって白の床をポーッと眺めている。しかしその目には光はなく、代わりに黒く沈んだようなものが見える。それはまさしく、絶望の色。

由美は目を閉じて重い溜息をつくとき、縮こまったまま横に倒れた。ひんやりと硬い感触が肌に伝わる。ただ、鳥の囁りと風がカーテンを揺らす音を聞いていた。まるで時間が止まったかのように由美は動かない。

冷たい空間に、白で統一された部屋、それに動かない由美。陽光が差し込んでいなければ霊安室を思わせる部屋で、由美はこのまま死人になりたいと――死にたいと考えていた。

由美は学校でいじめにあっていた。最初は無視されるだけだったが、だんだんとエスカレートしていき、教科書や体操着を切られたりするようになった。最近では暴力も振るわれるようになってきた。このような行為は相応のものだった。



由美たちは来年受験を控えているため、どうしても鬱憤うつぶんが溜まってしまふのだ。運動ができず、おずおずとしていたが、成績だけは良かった由美が標的になるのは必然的なことだった。加えて、由美は大手企業の社長令嬢れいじょうであるため、将来はそこに就職が決まっている。受験受験と言われてピリピリしているクラスで、一人場違いな程にゆつたりとした雰囲気をもとっている由美はクラス中から恨みの目を向けられた。由美には、味方が一人もいなかった。

もう、行きたくない。どうせ両親の会社に就職するのだから、行く必要なんてないじゃない。どうして、どうして、どうして……由美の頭の中はそれでいっぱいだった。両親にも相談した。私は学校でいじめを受けているのだ、と。

しかし母は言った。

「それくらい耐えられなくてどうするの？ 貴女あなたは強い人にならなくてはいけないの。社会に出たら理不尽な事だつていっぱいあるのよ？ 我慢することも覚えなさい。貴女ならできるわよね」

ね？と、母は由美の両腕を強く掴んで、軽く揺さぶった。殴られてできた痣が、ズキズキと痛んだ。

父は言った。

「大体、お前にも何か原因があるんじゃないのか？ もしかして運動が出来ないからじゃ

ないのか？私も妻もスポーツは万能なのに、なぜお前は出来ないんだ、そんなお前を見兼ねてみんなが手伝ってくれているんだらう。なぜそれが理解できない？頭だけはいと思っていたが、全く、お前には失望してばかりだ！」

父は由美の頬を平手打ちし、その勢いで床に倒れこむ。由美の頬は赤く腫れ、それと同時に熱く熱を持ち始めた。頬を押さえる由美の目に映ったのは鋭い眼差し。

両親は由美がいじめられている事を受け入れてはくれなかったのだ。それに絶望し、こうして塞ぎ込んでいる。

「はあ……」

思い出しただけでまた溜息が漏れる。

——プルルルルツプルルルルツ

その時、リビングにある固定電話が鳴った。由美は弾かれたように部屋を飛び出した。きっと両親のどちらかが掛けてきたのだらう。そもそもここに電話できるのは両親しかいない。

もしかしたら学校に行かなくてもいいって言うってくれるかも……！そんな期待を抱えながら電話に出る。

「はい、もしもしー！」

「由美！電話に出るのが遅い！何をしていたんだ！」

開口一番にそう怒鳴った父の声を聞き、反射的に頭を下げてしまう。受話器越しで姿の见えない父に。

「ごめんなさいお父様！学校へ行く準備をしていました」

由美の言葉に父は落ち着きを取り戻し、言った。

「今日も私たちは大事な会議があるんだ、変な真似まねをして邪魔をしないように。それと、前のような“くだらない事”は二度というんじゃないぞ。まあ、お前ならわかるだろう？」

「はい…、お父様…」

由美が力なく返事をする、一方的に電話が切られた。由美は再び暗闇に——絶望で染められた世界に突き落とされた。腕がだらんと下がり、その場に立ち尽くす。しばらくして、由美の手から受話器が滑り落ちた。その音で我に返った由美は呟く。

「行かなきゃ…。行か、な、きゃ…」

受話器を拾って静かに元の位置に戻し、何かに取り憑かれたようにふらふらとした足取りで自室へ戻った。時計を見ると八時十分を示していた。学校が始まるのは八時四十分。由美の家は学校から十五分ほどの場所にある。

なるべく早く準備を済ませ、靴を履いた。家を出る直前、溜息をついた。何回目かも分からない溜息を。

\*\*\*\*\*

教室に着いた由美を待つていたのは、突き刺すような視線と黒く汚れた机、そして、かすかな笑い声。机の上には丁寧に花が生けられた花瓶が置いてあつた。綺麗な白い花。これは確かスノードロップ。花言葉は――あなたの死を望みます――

由美はそれらを見下ろして、回つていない頭で考えた。何からやればいいのかやら……。とりあえず花瓶を移動させることにした。鞆を持ったまま花瓶を抱えて教室を出た。鞆を持つて行かなければ何をされるか分からない。それは机を見る限り間違いないかつた。階段を降りて職員室に向かう。

――コンコンコン

扉を開けて担任を呼ぶ。

「山下先生、いらつしやいますか……？」

小さな声だったが、他の先生が気が付き呼んでくれた。扉の前で待つていると、大柄の男――山下が出てきた。山下は由美を見ると不機嫌ふきげんに眉を寄せた。そして呆れた声あきで言う。

「なんだ、また持つてきたのか。もう持つてくるんじゃないやねえよ。邪魔なら自分でどうに

かしろ。俺は忙しいんだ」

由美が話す間も無く扉を勢いよく閉められた。由美はすみません、と消えそうな声で謝った。

由美は山下にもいじめのことを相談したが、こちらでも由美の言うことを信じてはくれなかつた。

「俺の生徒がいじめなどという愚劣ぐれつな行為を行うわけないだろ！皆賢く良い生徒ばかりだ。お前以外はな！これ以上くだらないうこというなよ！」

山下は鬼の形相ぎようそうで言った。山下は体格も大きいため、本当の鬼のように見えてあの時は怖かつた。

行く宛てがなくなつた由美はどこかにおける場所はないかと歩き回つた。校内は広いのに、花瓶一つ置く場所すらなかつた。しかし急がないとチャイムが鳴つてしまう。

「あそこなら…」

あそこ——美術室なら置けるかもしれないと思つた。美術室では時々花のデッサンをするところがある。だから置いてあつても不審がられないだろう。

肩を上下させて扉の前立ち、来た道を振り返る。良かった、水は溢れていない。ゆつくりと扉を開けると木の匂いが部屋から流れ出てくる。辺りを見回しながら入ると、窓辺に花瓶を置いた。幸いにも中には誰もいなかった。早まる鼓動こどうを落ち着かせな

がら教室へと戻った。

——キーンコーンカーンコーン

由美が戻ると、丁度チャイムが鳴った。席に着き、鞆を置くと、文字で埋め尽くされた机を眺めていた。しばらくして山下が出席簿を持って入ってくる。

すると異変に気が付き由美のところへやって来た。これで、いじめを認めてくれるよね…。これで、やつと…。

由美が山下の言葉を待っていると、山下は机を見て形相を変え

「何なんだこれは!!机に落書きするなど、何を考えている!!」

と叫んだ。予想だにしない言葉に由美は大きく目を見開き、顔を上げて山下に向かって叫び返す。

「私がやったんじゃないませー!これはクラスのみんなが…」

みんなに目を向けると一斉に睨にらまれた。それに怖気おしげ付いて喉がヒュツと鳴る。

「何を訳のわからないことを!すぐそうやってお前は人のせいに!もういい、放課後、職員室に来て!」

顔を真っ赤にしてそう言い放つと、山下は教室を出て行った。その途端数人の生徒が立ち上がり、由美を囲むように立つ。他の生徒はそれを見ている。

やがてリーダー格の女がこちらを見て見下した声で言う。

「由美ちゃんひどおい、私たちのせいにしてしまうとするなんてえ。考えたらわかるでしょお？あんなこと言ったらどうなるか。由美ちゃん賢いんだからさあ、ねえ？」

それを境さかいにクラス中から発せられた非難する声や馬鹿にした声が、由美に向かって突き刺さる。次第に心が圧迫されていく。まるで水の中にいるような感覚が由美を襲う。

苦しい、辛い、もう…嫌だ。

思わず泣きそうになるのを下唇を噛むことによつて抑えた。泣いてしまえばもつと酷くなることを知っていた。これ以上は、耐えられない。

これらの行為は学校に来る日は毎日、朝の教師が来るまでの間や昼休み、放課後に行われた。

今日は何をされるのだろう…

それだけが、思考が停止した頭の中を巡っていた。机を見つめる目が黒く沈む。それと同時に周りの声も頭には入ってこなくなつた。

そしてやつて来た、昼休み。

再び女が由美のところに来た。その手には裁縫用の裁ち鋏たばさみが握られている。刃が光を受けてキラリと光る。

女はニヤリと不気味に微笑むと、裁ち鋏を由美に向けて、言った。

「由美ちゃん、髪伸びたよねえ。邪魔になつてきたでしょお？だから私が切つてあげる

！

女と目があつた瞬間、椅子が倒れるほど立ち上がり後ずさる。顔から血の気が引いていくのを感じた。身体を震える。

逃げなきや！

本能的にそう思った。後ろを振り返り、扉に向かつて走り出す。

が、扉の前に立ち塞がる男子生徒に左右から腕を捕まえられた。強引に女のもとへ連れて行かれる。必死にもがいて抵抗する。しかし、男の力に女の由美が敵<sup>かな</sup>うわけがない。両腕を抑えられながら女の前に突き出される。由美は大きく目を見開き、荒い呼吸を繰り返した。

その間にも女は由美の近づいて来る。それに合わせるように生徒たちも興奮していき、早くやれ！と声があちこちから聞こえて来る。廊下側のカーテンは閉められており、誰も中を覗き見ることなどはできない。

もはや教室は処刑場と化していた。罪を犯した女とそれを裁く王女、そしてそれに歓喜する国民。女は赦しを乞うがそれを受け入れる者など一人もおらず、それどころか早く裁けと言う声飛び交う——そんな処刑場。

女は由美の髪を乱暴に掴み、大きく開いた鋏を近づけて——

ジョキツジョキツジョキツ



由美の長く墨のように黒い髪がどんどん切られていく。バラバラと落ち、自分の視界を埋め尽くす髪を見ながら由美はゆっくりと目を閉じた。見たくはなかった、これが現実だと受け入れたくなかった。

目頭が熱くなり、瞼の裏に溜まっていた涙が溢れ出した。乱雑に切られている髪に涙が染み込む。

生まれてから一度も切ったことのない髪が、こんなに雑に切られるなんて……。唯一、両親に認められたものだったのに……。髪だけは……。お願い……。もうやめて……!!

「あははは、いい感じになったじゃん！今のあんたによくあつてるよ！そんじゃ、片付けやつとけよ」

女は嘲笑しながらそう言うのと、鋏を机の上に置いて離れて行った。周りの生徒もそれに合わせて離れた。しかし視線は相変わらず由美に注がれ続けている。由美が片付ける無様で滑稽な姿を見るために。

ふと、由美の視界に男子生徒の上靴が映った。思わず顔を上げる。上から降って来るともしれない優しさに期待しながら。しかし上から降ってきたのは大量のゴミだった。

それを見てクラス中がどつと沸く。その男も笑いながらゴミ箱を投げ付け、仲間の元へと帰って行った。

「どうしてっ私が……。こんな、こと……!」

由美の言葉も消えてしまうほどの笑いの中で、泣き続けた。これ以上酷いことが起ころうとも、今だけは泣いていたかった。そうしなければ、心が押しつぶされてしまいうだった。

どうして……。いじめを受けてから毎日思っていたことだった。どうして自分がいじめに遭っているのか分からなかった。どうして担任がいじめを認めてくれないのか分からなかった。どうして両親が学校に抗議をしてくれないのか分からなかった。どうして誰も助けてくれないのか分からなかった。だから――

「どう、してっどっして、私、なの：!?!どうして!?!」

誰かに答えを求めるように叫んだ。たとえ、その答えてくれる人がいなくても。

由美の叫びを聞いてクラス中から答えとは信じがたい理不尽な言葉が飛ぶ。先ほどの嘲笑あざわらうような視線は憎しみの視線へと変わっていた。

――マジでうざいから

――目障りめざわなんだよ

――苦労も知らないくせに

耳が、頭が、心が痛い。由美は後悔した。誰かに助けをたことも、いじめの理由をクラスの人々に聞いたことも。言葉が深く強く由美の心に刺さっていく。刺さった所から徐々に亀裂きれつができて、小さな破片が落ちていった。

もはや、由美自身の防衛機能さえも働かない。このまま壊れてしまったほうが楽なのかもしれないと思つた。楽になれると言うなら、由美は間違ひなく壊れる方を選ぶ。はじめほど苦しいものなどこの世には存在しないのだから。

由美の心が壊れる直前、あの女が、言つた。

「可哀想だね、こんな目にあつて。でもあんたが悪いんだよ？ 私たちの気持ちも理解しようとしなから。ねえ、今どんな気持ち？ 苦しい？ 悲しい？ じゃあ死んだら？ ねえ、早く死んでよ！ 生きる価値のないゴミなんかこの世にいらなんだよ!!」

ガコンツ

何かが押された。何かは分からない。だが確実に由美の中で何かが押されたのだ。

由美はふらふらと立ち上がり、鞆を持つて扉に向かう。とりあえず、どこかに行きたかつた。自分でも何が何だか分からないこの状況で、冷静に後片付けをする事など出来なかつた。

静寂に包まれた教室の中で、自分の心臓の音がクラスの生徒全員に聞こえてしまいうなほど大きく鳴る。動悸がだんだん激しくなると同時に呼吸も荒くなる。

由美はそのまま教室を出て、その音を隠すように走り出した。走つて、余計に呼吸がしづらくなつても、走つていたかつた。得体の知れないものから逃げたかつた。

教室に残された生徒たちはただそれを見ることしかできなかつた。

急に目を見開き、大きく口角を上げて笑い出した由美のことを。

## 【二輪の彼岸花】

昼休みのも関わらず急な動悸どうきにより教室を飛ぶ出してきた由美だったが、特に行く宛もないもない。一先ず家に向かつて歩いてきた。路地を通り、少し遠回りをして。

ようやく落ち着きを取り戻した由美はどこに注意を向けるわけでもなく、ブーツと歩いてきた。

が、突然鞆の中から携帯の着信音が鳴り始めた。咄嗟に取り出して画面を見て見るとそこには、「お父様」の文字。一瞬で血の気が引き、携帯を持つ手が震える。

「お、おと、さま……！」

由美のはした声は小さく、着信音に掻き消されてしまった。出ない、と……！分かっている、分かっているのに体が動かない。しかしでなければ今後自分がどうなるか分からない。そのことが由美の上に重くのしかかった。

一度大きく深呼吸をすると、画面をフリックして電話に出た。震える手を抑えて耳に携帯を当てる。

「おい！由美！お前は何をしているんだ！」

思つて通りの言葉が聞こえてきた。父の声は由美の脳内まで響く。続けて言う。

「あれだけ言っておいたのにお前と言う奴は……！呆れて物も言えん！私たちには大事な会議があると云っただろう！お前のすること一つ一つが私たちに影響を与えると、なぜ分からない!!」

「ごめんなさい、ごめんなさいお父様！ごめんなさいごめんなさい！」

由美は腰を折り曲げて謝った。これ以上父の声を聞きたくはなかった。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……!!」

由美の口から呪文のように繰り返される言葉が、誰もいなくなつた路地に消える。目をぎゅつと閉じて、早くこの時が終わるようにと願った。そんな願いも空しく父の声が聞こえる。

「出来ないにも程があるぞ！じつとしていないことすらできないのか!?!」

父は怒りのあまり由美の声が聞こえていないようだった。こうなつたら父が由美の話聞くことなどない。いつもならすぐに拳が飛んで来て由美の体を傷つける。それは生徒たちにやられるよりも断然痛い。思い出しただけで身体のあちこちが痛んできた。

父は怒りに任せて叫ぶ。

「全く！なぜお前なんかが私の子どもなのだ！こんな出来損ない、私の家にはいらん！何処へでも好きな所に行き野垂れ死んでしまえ!!」

ガコンツ

また押された。これは一体なんなのだろう。未だに何かは分からない。ただ、何かを押されたことは感じられる。この感覚があるとすぐに周りの音が、一瞬ではあるが消える。ついに体がおかしくなってしまうのだろうか。この感覚の正体は一体…。

「貴女は何をしているの!?!どうして言うことが聞けないの?私が優しくするのもこれま  
でよ!もう許さない!!」

どうやら電話を変わつたらしい母が金切り声で言う。

優しい?あれが?母が由美に優しくしたことなど、あつただろうか。いや、一度もない。幼少時でさえ、母は家庭よりも仕事を取つた。由美の世話はいつも使用人がしていた。家族で過ごす時には「貴女は出来る子」と耳にタコが出来るほど言われたものだ。娘の幸せよりも自分の幸せを優先し、優秀な娘を育てた母親として注目を浴びたがつた。それに利用された由美は、過大な期待をかけられた。もしもその期待に答えられなかつたり、することを拒否した場合にはヒステリックな声を上げて精神的に圧力をかけた。

「貴女なんか産まなければ良かった!私の踏み台にもならない役立たずな子!ああ、私のお腹にこんなお荷物<sup>お</sup>が宿っていたと知っていたら、墮<sup>お</sup>ろしてやったのに!!」

ガコンツ

また、押された。それと同時にまた動悸が激しくなる。思わず携帯を落としてしまった。携帯からは母の声がまだ聞こえている。これ以上機嫌を損なわないためにも、早く拾わなければ。頭では理解しているのに体が言うことを聞かない。いや、聞かないどころか由美は“この携帯を壊す”という衝動に駆られていた。

——これを壊せば解放される

そう思った瞬間、由美は携帯を踏みつけていた。何度も何度も、何度も何度も何度も。身体に繋がれた鎖を断ち切るように、強く踏んだ。

しばらくすると声は聞こえなくなっていて、画面も粉々に割れてしまっていた。それでも尚、踏みつける足は止まらない。何かに取り憑かれたように、ずっと。

最後に思いっきり踏みつけると、ゆつくりと足をどけ砕け散った携帯を見下ろす。おそらくもう電源もつかないであろうそれを見つめながら、肩を上下に揺らす。疲れているはずの由美の顔に浮かぶのは、あの時と同じ“笑み”。

「あ…、わ、たし…」

そしてその“笑み”が恐怖に変わるころ、由美は自分がとんでもない事をやってしまったことに気がついた。こんな事をしたところで、両親から解放されるわけがない。解放されるのなら前からそうしている。

聞こえるはずもない両親の由美を責め立てる声が聞こえて来そう、由美は耳を強く





先程の場所から遠く離れた道を、由美は息を整えながら歩いていた。口の中は僅かに血の味がする。ここまで全速力で走ったのはいつぶりだっただろう。ろくに準備もせずに走ったせい、太腿ふとももから脹脛ふくらはぎにかけての筋肉がピクピクと痙攣する。

もともと運動が得意ではない由美が、あの男から逃げ切れたのは奇跡といつてもいい。しかし見つかるのも時間の問題だ。出来るだけ遠くに来たつもりだが、そんなに離れていないのかも知れない。子どもの距離感はあるてにならない。

呼吸がようやく落ちつた頃、誰もいない公園を見つけた。砂場、ブランコと滑り台しかないごく普通の公園。そのブランコに座り空を見上げると、一つ溜息を溢した。

雲ひとつない少しオレンジがかつた青空に吸い込まれてしまいそうだ。いや、いつそ吸い込まれて溶けてなくなってしまう。出来る事なら今すぐにでもこの世から存在を消して誰とも関わらずにいたい。しかしそのような事ができる訳もない由美はこうして一人最後の自由を噛み締めているのだった。

おそらくあの男が警察にでも連絡している頃だろう。携帯も、鞆もその場に置いてきてしまった。これでは自分があの人達の娘だという証拠を残した事に変わりない。自分は大馬鹿ものだと、この時改めて思った。

由美が捕まってしまうのも時間の問題だ。警察から連絡を受けた両親はきつと血眼ちまなこになって由美を探しているだろう。由美のことが心配で仕方がないと涙ぐみながら警

察に搜索願を出し、必死になって男に話を聞いている——ように見える。しかしその実は自分達の株が下がらないように男には口止めをし、警察にはこれからするであろう所業を隠すために娘を愛してやまない父母を演じている。

結局は自分達の価値が下がらないように、下がる可能性があるものを排除しようとしている。誰にもバレることのないようにこつそりと。

由美には分かっていた。両親に捕まったらどうなってしまうのか。それが——あらゆる方法で消されてしまう姿が、何も考えられなくなった空っぽの頭の中で流れる。恐ろしくて、恐ろしくてたまらない。自らの手ではなく両親の手によって由美という一人の存在が消されようとしている。

「何度も願っていた」それ”を由美は激しく拒み続ける。それでも突き付けられている現実は高校生の由美にとっては残酷で、もう変えられようもない”由美の最期”なのだ。

由美の目は絶望の黒から恐怖の黒に塗りつぶされた。視界がぼやけ、頬を生暖かいものが伝う。身体がガタガタと震えて収まる気配もない。自分が迎えるべき運命に嘆き悲しみ、しかしどうする事も出来ない役立たずで愚かな自分は、こうしてただ最期の時を待つしか出来ない。

それでも、由美の中の”どうして??”は消えることはなかった。

「どうしてっ!」

由美の掠れた声は誰にも届かず消えた。――はずだった。

「あー! 目標発見!!」

背後から急に発せられた言葉に驚き、思わず振り返る。そこには由美より頭一つ小さい少年が笑顔で由美に手を振っている。少年は学生服に真紅のフード付きマントを羽織っていて、なんとも怪しい雰囲気が漂っている。

少年が現れた事により由美の涙は止まり、代わりに大きく目を見開いてその少年を見つめていた。

すると少年は此方に向かって走ってくる。由美はその瞬間に追っ手かもしれない、と考え逃げ出そうとブランコから立ち上がり走ろうとする。だが急に視界が揺れ、倒れてしまった。おそらく泣きすぎて水分不足になってしまったのだろう。

由美が立ち上がるうとする目の前に手が見えた。見上げると少年が少しかがみ手を差し出してきてくれた。

「え…あ、ありがとう」

突然のことに戸惑いながらも少年に起こしてもらおう。

「どーいたしました! ねえ、お姉さん! 僕と一緒に来てくれない?」

少年は元気にそう答える。由美はまだ何が何だか分からなかったが、危険な感じしか

しないので一歩後ずさる。それを見て少年が両手を振って慌てて言う。

「べ、別に何もしないよ!?!ただ僕達の家招待したいだけなんだ!」

「招待?どうして?」

「だってお姉さん思いつめたような顔してたから!そういう人を家に招待するのが僕の役目なんだ!」

そう言つてニカツと笑う少年を見て少しばかり考える。

この少年の言う通りただ思いつめた人を家に招待しているだけだとすれば、行かないではないだろう。既に帰る場所もなくし、生きることを諦めていたのだから何かしらしてくれそうだ。しかし少年がもし両親の寄越した追っ手ならば由美は――。

「だから…ね?来てよお姉さん!お姉さんにとつて悪い事は何も無いよ!むしろ良い事ばかりさ!」

そんな由美の不安を包み込むかのように両手を広げる少年。少年の言葉に妙に納得してしまう。このまま行つても良いのではないかと。

私の返事を待つ顔には焦燥しょうそうと不安が滲にじみ出していた。流石に可哀想に思いコクリ、と頷く。それを見てはあつと顔を明るくした少年は小さくガッツポーズをし、えへへと笑った。

「僕は類!よろしくねお姉さん!それじゃあついて来て!」

類は由美の手を引いて歩き出す。類の後ろ姿を見ていると頬が自然に緩む。こんなに落ち着いていられるのはいつぶりだっただろうか…。由美の手から感じる類の体温が由美に心と体を溶かしていった。

## 【三輪の彼岸花】

類に連れられてやって来たのは「マジックリリー」と書かれた看板が掲げられた喫茶店。アンティーク調のその店は、ビルとビルの上に挟まれて小さく見える。しかしそんな事はなくて結構な広さがあることが、ドア以外の正面の壁全面に取り付けられた窓から窺えた。

類が由美の手を離してドアを開けてくれる。カラコロン、と心地よい音色が店内に響き、カウンターの席に座っていた女性が二人の方を振り返る。由美が入って来るのを見ると満面の笑みを浮かべて此方に走って来た。

由美がおろおろとしている横を通り抜けて類に抱きついた。ぎゅーつと効果音が出そうなくらいに強く。

「類、良くやった!! あんたなら見つけて来てくれると思つてたよ!」

類を抱き締めながら頭を乱暴に撫でて言う。類よりも頭二つ分ほど高い女性は露出度の高い黒の服に類と同じマントを羽織っている。

「え、えへへ、そう、かなあ。」

類も嬉しそうに目を細めているが少し苦しそうだ。手がぴくぴくと痙攣している。

「あ、あの……」

どうしたら良いのか分からず、取りあえず二人に声をかけた。あ、と声を上げて頬を解放する。頬は軽く息切れを起こしている。

「ああ、ごめん、勝手に盛り上がっちゃって。ここに客が来たの久しぶりだったからついで」

女性は眉を下げた謝ると、続けて言った。

「私は亜理紗。このマスターをしているんだ。よろしく」

そう手を差し出して来たので由美も由美です、短く自己紹介をして手を差し出し握手をする。白く綺麗な肌が照明の光を受けてより白く見える。

「じゃあ、行くうか」

と由美の手を引いて歩き出す。突然のことで頭がつかないが、ぐいぐいと引つ張られてついに行くことしか出来ない。

「あ、あの、どこに行くんですか!? 私、帰ります!」

慌てて亜理紗に尋ねる。なんだか嫌な予感しかしない。二人とも同じ物を身につけているし、変な宗教団体だったりするのかもしれない。由美の中で不安が巡り始める。その間にも亜理紗は足を止めない。

「まあまあ、そんな事言わずにさ、ちよつとだけ付き合つてよ。ここに来たつてことは他



に行く場所もないってことでしょ？良いことあるからさ、ついて着なよ」

どうやらここに着た時点で亜理紗に逆らう権利はないようだ。由美も諦めてついて行く。それに「良いことあるからさ」という亜理紗の言葉が由美に妙に安心感をもたせた。この二人に言われてしまうと妙に納得してしまうのは何故だろうか。類の時も妙に納得してしまいこうしてここまでついて着たが、亜理紗の場合も例外ではないらしい。

亜理紗がカウンターの左にあるドアを開けて、その先に続く闇に吸い込まれるように三人は中に入って行った。類がドアを閉めるとそれまで足元を照らしていた明かりが消え、本当の暗闇が訪れる。当然何も見えないし、亜理紗に手を引かれていなければ自ら前に進むことすらままならない。床だけしかないような感覚、つまり綱渡りでもしているような感覚に襲われた。少し冷えてきた暗闇の中を三人の足音と由美の荒い呼吸だけが満たす。

しばらくして薄く長方形の明かりが見え始めた。実際は数分だけだったであろうが、由美を支配していた不安と恐怖によって長時間歩いていたように思える。由美は大きく溜息をつく。これでやつと、闇から抜け出せる。

隙間から差し込む明かりが強く由美達を照らした頃、亜理紗が立ち止まりドアノブを掴んで押し開ける。その瞬間光が由美の視界を奪い、予期していない眩しさに目を固く

閉じる。

「あ、眩しいから気をつけなよ」

と、今更すぎることを言う亜理紗は平気そうだ。もちろん類も。

由美が目を閉じている間も亜理紗は進み続ける。

足元からざくざくと音が鳴る。歩いているのは床ではなくどうやら砂らしい。それに僅かだが風が吹いている。ここは外なのだろうか。それを知るためにも、こうしてずっと目を閉じているわけにもいかない。

ゆつくりと目を開けていくと、焦点が合う前に真紅に染まった彼岸花が由美の視界を埋め尽くす。その光景に目を奪われ、思わず立ち止まってしまふ。亜理紗も急なことに由美の手を離してしまった。由美の後ろにいた類も由美にぶつかる寸前で足を止めた。

「凄く、綺麗ですね……」

由美は感嘆を漏らしそれらに見入った。辺りを見回してもあるのは彼岸花の赤一色だ。いや、よく見れば由美達が歩いてきた道の先に、小さな木造の小屋が見えた。

「そうでしょう？これね、私達が育ててるんだ」

由美の言葉に自慢気に言う亜理紗。満面の笑みを浮かべてふふふ、と笑っている。相当嬉しかったようだ。類は何も言わなかったがにこにここと笑っている。

小屋が近づいてくると類が亜理紗の脇を通り抜け、小屋のドアを開けて待っていてく

れた。

ありがとう、とお礼を言い中に入る。

亜理紗は入るとすぐ、類に紅茶をお願い、と頼んだ。類は頷くと戸棚の中から“Lycoriss”と書かれた袋を取り出しティーポットに入れお湯を注ぐ。そして机に置かれていた砂時計をひっくり返し時間を測っている。大体3分といったところか。

その間に由美達は小屋の真ん中ほどに設置されていたテーブルを挟むようにして座る。由美は膝の上に手を置いて窓から見える彼岸花をぼーっと眺めていた。

「ねえ由美、あんたさ恨んでいる相手とかいないの？」

唐突に投げかけられた言葉にえ、と返すことしか出来ない。亜理紗は続ける。

「ここに来れる人って何かしらの負の感情を持つ人だからさ、由美も何かあるのかなって。あるなら手伝うけど？」

「て、手伝うって何をですか……？」

戸惑いを隠せない由美に亜理紗はニヤリと微笑んで言う。

復讐だよ

思いもよならない言葉に大きく目を見開く。

「ふ、復讐なんて、私は、そんなこと、出来ません！」

両親の顔が頭に浮かぶ。あの二人に復讐なんてしようものなら、間違いなく消されて

しまう。ただでさえ今はその危機に直面していると言うのに。それを思い出しただけで頭が真つ白になり体が震え出す。

「どうしてだい？嫌なんでしょ？今の生活が。それを引き起こした人達が。だったらその人達に自分の犯した罪を分からせてやろうよ」

亜理紗はそれがさも当然な事のように言う。

「わ、私は…」

俯うつむきながらも考える。自分はどうしたいのだろうか。両親に、クラスメイトに、担任とうじんに——復讐ふくむしたいのだろうか。自分に過大な期待を持つ母に、自分を消そうとしている父に、自分に暴力を振るつたクラスメイトに、自分に暴言を吐くようになった担任に。

——私は一体どうしたい？

「はい、由美お姉さん。この紅茶はここで作ってるんだ。これ飲んで一旦落ち着こう？」  
由美に目の前に紅茶が入れられた白のティーカップが置かれた。ね？と類びくが微笑む。湯気が立つそれからは紅茶独特の香りが由美の鼻孔びくをくすぐる。

「いただきます」

紅茶の風味が口いっぱいに広がる。どうしてだろう凄く落ち着く。それにこれを飲んでいると体の芯から何かで満たされるような気分になる。

「で、考えはまとまった？あんたはどうしたいのさ？」

亜理紗は手の甲に顎あごを置きながら由美に考えを言うように促す。

「私は、あいつらに復讐してやりたいです」

亜理紗の目を見て答える。その答えに満足したように亜理紗は不敵な笑みを浮かべる。

もう、どうでもよくなった。自分が消えることも、復讐を実行することも。どうせ消えるならあいつらをひどい目に合わせてやりたい。自分一人があんな仕打ちを受けるなんて、理不尽じゃないか。あいつらにはそれ相応の罰を与えなければ。

由美はまたあの“笑み”を浮かべていた。しかし由美はその事に気づくことはない。そして二人はそれを見ても嬉しそうに笑うだけで怯えた顔はしなかった。

「由美、私達はあんたの復讐を手伝ってあげる。でもね、手を下すのはあんただからね。それを覚えときな」

由美の笑みが止むと亜里沙はそう言って立ち上がる。

由美も立ち上がり頷く。亜理紗は類に布団の準備をするように言うのと、クローゼットを開け何かを探しだした。

「由美お姉さんちよつと手伝って、僕一人じゃ運びづらいんだ」

類が手招きをして呼んでいる。

由美は類のところに向かい、類と一緒に三人分の布団を運ぶ。やはり三人分ともなれば結構な重さがあり、背の小さな類が持つには苦しいだろう。それに前が見えなくなってしまうので、つまず躓いて転んでしまう可能性も高い。

「あ、あった！由美って小さいからな、多分これでいいと思うけど大きかったら言いな」  
亜理紗が真紅の綺麗に折りたたまれた布を由美に渡す。広げてみると亜理紗達が身につけているフード付きのマントだった。

「これをつけてるとね、彼岸花達が力を貸してくれるんだ。そしたら復讐も上手くいくよー！」

類が笑顔で言う。それに眉をひそめて聞き返す。

「彼岸花達が…？どういうこと…？」

由美は視線を窓の外に彼岸花に向ける。いつの間にか沈んでいた夕日に照らされてより赤く見える。

「あの花達は不思議な力を持っているんだ。でもそれがどのような結果を引き起こすのかは僕達にも分からない。でもね、この彼岸花の液で染めたマントをつけていると良いことが起こるんだ。だから大丈夫だよ」

由美と同じ方向に視線を向けながら優しい声音で言った。もちろん微笑んで。

「ねえ、もう明日に向けて寝ちゃおうよお」

大きな欠伸をしながらすでに布団に入っている亜理紗が言う。由美は椅子にマントを掛けると、類と同時に欠伸して布団に向かう。欠伸は伝染するあくびと言うが本当にそのようだ。急に眠気が襲いかかってきて、眠くてたまらない。今までもろくに睡眠時間を取っていないからかもしれない。

由美は二人に挟まれるようにして布団に入り、見慣れない天井を見ながらぼんやりと考える。今日は今までにないことがあり過ぎた。授業をサボって学校から抜け出したこともなかったし、携帯を踏み壊すこともなかった。こうやって人と一緒に寝ることもなかった。———こんな、幸せが訪れるなんて思ってもみなかった。1日だけでも両親から解放されることが出来るなんて。最初からこうしておけばよかったと今更ながらに思う。

「家族みたいですわね」

由美は思わずそう口に出していた。類と亜理紗がこちらを向きそうだね、と返す。

———私が欲しかったのはこれなんだ

ふわふわとした気分のまま、由美は意識を手放していた。

\*\*\*\*\*

翌日の早朝六時、由美は両親が経営している会社の前に来ていた。制服に真紅のマン  
トを羽織り、十三階建てのビルを見上げて立っていた。亜理紗と類は他の場所から見  
守っているらしい。

由美は大きく深呼吸をすると、会社の自動ドアを抜けてエレベーターに乗って社長室  
を目指す。この時間ここに来ているのは社長である父と、副社長である母だけだ。今な  
ら他の人に邪魔されずに済む。

最上階に着くとエレベーターを降りて、右に曲がると一つの部屋を見つけた。どうや  
らここのようなのだ。

由美がドアノブを持った時、中から話し声が聞こえた。

「全くどこへ言ったんでしようねあの子は！今まで私が苦労して育てて来たと言うの  
に、これでは今までの時間が水の泡じゃないの！それに優秀なお子さんをお持ちで羨ま  
しいって言われてたのに、その子が家出だなんて知られたら私はなんて言われるか：  
！」

母が金切り声で捲くし立てた。コツコツとヒールの音が早足に右往左往しているの  
が聞こえる。これは母の苛立ちが頂点に達した時の癖だ。あの音でよく精神的に追い  
詰められたものだ。

「まあまあ落ち着かないか。あんな奴は私達の子どもではなかったのだよ。あんな奴が



私達の子どものな訳がない、そうだろう？だがそのまま放つて置くわけにもいかない。私達に不利になるようなことを他人に話されても面倒だからな。大丈夫さ、あいつが見つかつたらどこか遠くへ連れて行つて始末すれば問題ない」

父が母を宥める<sup>なだ</sup>ようにそう言うと、母はそうね、とその意見に賛成したのだった。

ガコンツ

由美はその音が自分の中で鳴るとドアを開け中に入った。両親は突然のことにしてしばし固まつて、俯く由美を何者か、と見つめていた。しかし由美が顔を上げた時、それが由美だとわかると消えそうな声で由美、と言つた。大きく見開かれた両親の目は恐怖が溢れ出し、開いたままの口からはカチカチとはが震える音が聞こえている。

由美は笑いながら言つた。

「お父様、お母様。私はもう、あなた方の人形でいるのはやめます。今まで私にしてきたことを後悔し、地獄に落ちてください。それでは、さようなら」

由美は持つていた花籠<sup>はなかご</sup>から一掴みの彼岸花を両親に投げつけた。

瞬間、炎が両親を包み込む。二人は床を駆け回つて炎を消そうとするが、火力を上げるだけで一向に消えそうもない。

ぎゃああああああああああああああああああああああ

いやああああああああああああああああああああああ

二人の断末魔だんまつまと炎の熱を浴びながら、社長室を出て再びエレベーターに乗ってしまで降りる。通常は作動するはずの火災報知器も作動しない。これが彼岸花の加護か。

由美は両親を焼き殺したというのに、罪悪感も恐怖も不安も感じていなかった。今ならなんでもできる気がした。

「さ、次に行きましようかね」

エレベーターを降りると由美を待っていた亜理紗が言った。類はどこかに行っているらしく、ここにはいなかった。

「そうですね、亜理紗さん」

いつも通りになった由美が亜理紗の手を握り歩き出した。次に行く場所は学校だ。

\*\*\*\*\*

午前八時三十分。類も後から合流して学校の裏口に来ていた。正門はまだ生徒が多く、そこに居るのは怪しいがられると思ったからだ。

「じゃあ行つて来ますね」

二人から新たな花籠を貰い、裏口から入って職員室へと向かう。裏口が開いているか心配だったが、ドアノブを捻ると簡単に開いた。

職員室までは誰ともすれ違う事なく来る事ができた。さて、と扉を開けようとすると先生達が話す声が聞こえて来た。

「あの花瓶割つたのやつぱりあの子ですよ。山下先生のクラスの」

花瓶つて、美術室に置いたあの花瓶のことだろうか。割つた？一体何のことだろう。

「ああ、すみません。本当に迷惑をかけてしまつて…」

問われた山下は申し訳なさそうに答える。

「いいや、仕方ありませんよ。あんな奴ならやりかねませんよ。あんなクズな生徒ならね」

それに続けて他の先生も言う。

「大変ですよ、あんな落ちぶれた生徒の担任を持つて」

山下を慰めて<sup>なぐさ</sup>いるらしい先生の声を聞くと開き直つたように山下は言う。

「全くですよ。あんな気持ち悪い生徒なんてもうごめんです」

ガコンツ

職員室の扉を勢いよく開け、中に入った。先生達が一斉に由美の方を見る。由美は後ろ手に扉を閉めると、山下の前に立ち笑つて言う。

「おはようございます、山下先生。今日は花瓶じゃなくてお花ごと持つて来ました。今度はちゃんと受け取ってくださいね」

先生達が恐怖の目を向けて来る中を、山下に向かつて一掴みの彼岸花を投げつける。

瞬時に炎が山下を包み込み、山下は暴れ回る。他の先生達は驚きに目を見開くだけでその場から動くことができない。その間に職員室内を走り回り、彼岸花を巻き散らす。

うわああああああああああああ

ぎやああああああああああああ

先生達が炎に包まれ暴れ回るのを見て由美の“笑み”は止み、冷酷な目でその光景を見る。なぜか開かない扉の前で焼けていく先生達を見るのにも飽き、普通に扉を開け職員室を出て扉を閉めなおす。

教室に向かう廊下には誰もいなかった。今頃はホームルームの時間であるためおそらく先生を待っているのだろう。まさか扉を閉め切れるとは思っていなかった。これを使わない手はない。そうだ、最初で最後のクラスでのゲームだ。楽しそうだな、とまた“笑み”が漏れる。

教室の扉を思いっきり開けると、生徒の視線が由美に集まる。しかしその瞬間空気は凍りつき、生徒達の動きも止まる。由美は扉を閉め、教卓まで歩いていくと生徒全員に向けて言った。

「みんな、おはよう。今日はねみんなと仲直りしようと思つてここに来たの。仲直りするにはゲームでもした方がいいと思つて考えてただけど、さつき思いついたの！題し

て

人間射殺ゲーム!!

「それでは、スタート!」

生徒達は突然のことに動くことが出来ない。その隙に一人、また一人と彼岸花を投げしていく。そしてそれが境に生徒達が扉にしがみ付くが、やはり扉は固く閉ざされていて開くことはない。

断末魔の大合唱が教室内に響き渡る。それを聞いているうちに由美の口からも自然と笑い声が溢れ出す。体をくの字に折り曲げて笑う。今まで自分を苦しめてきた原因がこんなに簡単に潰れるなんて……! ああ、自分は狭い世界で生きていたんだなと思う。はやくこっちにくれればよかった。

折り重なる断末魔が小さくなって来ると、由美は教室を出て扉を閉める。あんなに大きな声で叫んでいた声も、扉を閉めて仕舞えば全く聞こえない。階段を降りて校門まで向かう。そろそろ亜理紗達も来ている頃だろう。

校門に着くと予想通り亜理紗が待っていた。類はまたいない。

「お疲れ様、由美。どう? 気分は」

校門に寄りかかりながら由美に尋ねる。

「とってもいい気分です。こんなの味わったことないですよ!」

亜理紗に笑顔で答える。

しばらくすると類が戻って来た。亜理紗と類は喫茶店へと歩き出す。

しかし、由美はその場に立ち止まっている。もう大分由美と離れた時、それに気づいた亜理紗と類が由美に手を振りながら叫ぶ。

「早くう、帰るよお!!」

——私の居場所はここだったんだ!

「はあい!」

由美は二人の方に走って行った。

【枯れる】